



2005年 12月15日発行(隔月刊)



う 羽 化 か

2005年12月
第 53 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

点字から識字までの距離 (知的障害の方への図書館サービス) 「さんさんプラザ」への貸出 (2) (山内 薫)	・・・ 1
漢文のページ	・・・ 5
酔夢亭読書日記 (13) (安田 章)	・・・ 7
<イネーブル・ライブラリー> としての青空文庫 (富田 倫生)	・・・ 9
哀れ秋風よ情あれば伝えてよ (白石 弘明)	・・・ 18
「朝日歌壇・俳壇」を漢点字訳して (岡田 健嗣)	・・・ 20
ご報告とご案内	・・・ 22

点字から識字までの距離 (49)

知的障害の方への図書館サービス(9)

「墨田さんさんプラザ」への貸出(2)

山内 薫(墨田区立緑図書館)

二〇〇四年の九月九日、いよいよ「墨田さんさんプラザ」への第一回の貸出が始まった。

当日は区内各館の担当者八人が一時半過ぎにまず立花図書館に集合し、すでに各館から送ってあった本やCDを団体貸出用の箱に収め、それをブックトラックに載せて、図書館から四〇メートル程のさんさんプラザまで押していった。

一二時の一〇分ほど前にさんさんプラザに着くと、日頃緑図書館を利用してゐるK君が待ちきれないというように階段から下りてきて「来た！来た！」と盛んに階段を上り下りして歓迎してくれた。

施設の職員の方も彼のはしやぎぶりには少々驚いていたようだった。

店開きの場所とは三階にある食堂前の廊下で、同じ階にある多目的室から運んできた机二つとソファアにはビジュアルな本を並べ、ブックトラックにはCDとマングを並べ、もう一つの机を貸出用の机にして利用者

を待った。

一二時のチャイムと共に皆さん次々と食堂に集まって来る。食堂前に並べてある本を覗いていく人も何人かいて、図書館が来るのを待っていてくれたという雰囲気にあふれていた。

事前に図書館の「かじだし券」を作つて欲しいと要望のあつた八人分その他に、図書館を日頃から使つてゐる人やかつて図書館を利用したことのある人が六人、七人、その他に新たに十数人の方が登録をして資料を借りて下さつた。結局二八名の方が、本を一八冊、漫画を二五冊、CDを二枚、雑誌を二冊の合計六七点の資料を借りて下さつた。

当日借りられた資料は次のようなものだった。

本では、「ミニカー大百科」「煌めく歌星―永久愛蔵写真集」「大相撲なんでも百科」「貴花田―史上最年少横綱だ」「少年紀―スマップ写真集」「ビーズ編み・織りおしゃれなアクセサリー&バッグ」「ゴジラXメカギラス」「国鉄・JR特急のすべて」「でか足



▲ 第1回食堂前での貸出風景

国探検記(椎名誠)」「東京都電六〇〇系」「JR新幹線(ヤマケイJRブックス)」「国鉄JR特急のすべて(ヤマケイJRブックス)」「西武(ヤマケイ私鉄ハンドブック)」「京王帝都電鉄(ヤマケイ私鉄ハンドブック)」「手のりの小鳥楽しみ方ブック」「忍たま乱太郎きょうふのゆうれいせん」の段」

雑誌では、「月刊メジャーリーグ 二〇〇三年五月号と二〇〇四年三月号」

漫画では、「ドラゴンボール」が七冊、「美少女戦士セーラムーン」が二冊、「美少女戦士セーラムーンR」が二冊、「コードネームはセーラV」「ときめきトゥナイト」のセットもの、「うる星やつら」が四冊、「ちびまる子ちゃん」が二冊、「のび太とブリキの迷宮」、「のび太とアニマル惑星」「のび太の日本誕生」

CDでは「東京デイズニールランド一五周年アニバーサリーミュージック七二」「となりのトトロ」「男気(氷川きよし)」「SEASON(浜崎あゆみ)」「ウル(SMAP)」「TVヒロインアニメベスト」「最新テレビまんが大行進」「最新テレビまんがベスト」「最新テレビアニメ大行進」「石川さゆり 恋・めぐる季節に」「美少女戦士セーラムーンスーパーベスト」「THE EXIT(DA PUMP)」「阪神タイガース応援歌」「KinKi Single S

election」「C album(KinKi Kids)」「金田一少年の事件簿オリジナルサウンドファイル」「クールくベスト・セレクション(SMAP)」「SMAP 009」

やはり事前に要望を聞いていて、そうした本を中心持っていたので、当然そのような資料が借りられた訳だが、要望では特に出なかつた本としては鉄道関係の本がたくさん借りられた。

また要望のあつたCDの一部は図書館でもリクエストが多くて当日までに用意できないものがいくつあつた。

当日利用者と会話を交わしながら出されたりクエスト資料は次のようなものだった。

「ぐりとぐら」

「カナダの旅行ガイド」「松井秀喜の写真の多い本」「ベツカムの写真集」「お相撲の本」「花の写真(漢字が読めない)ので平仮名、振り仮名のあるもの)」「ビーズで作る指輪



▲お料理の本と韓国ドラマの雑誌を見る

の本」「東武電車の本」、漫画の「ちびまる子ちゃん」「ドラゴンボール」、CDでは「太田裕美」「東海林太郎」「石川さゆり」「八代亜紀」「モーニング娘」「ディズニールランドのパレードのCD」など、前より具体的な要望も寄せられるようになった。

一〇月一四日の第二回目の訪問時には、第一回目の時には荷物で埋まつていた多目的室が片付いていたので、三〇平米弱あるその場所を使うことにした。

部屋の真ん中に机を二台ずつ二ヶ所に置き、そこに本を並べ、CDはその部屋にあったスチール製の棚に並べた。一二時半近くにはその部屋に二〇名以上の利用者が集うという盛況な状態が続いた。

この二回目の訪問の時、貸出をしている最中に、ある利用者が貸出用の机にやってきて「トランスフォーマー」というような言葉を発表したので、「トランスフォーマー？」と聞き返したところ、「トランスフォーマーも知らないのか、このオヤジ！」と怒鳴られてしまった。近くにいた施設の職員の方がそんなことを言うものではないと彼をなだめて下さった。

しかし、アニメに登場するロボットであるとは全く知らなかったために、怒鳴られるという結果を招いてしまった訳で、彼には申し訳ないことをしたと感じてしまった。

所謂切れるという訳ではなくても、自分の話してることを相手が理解していないことで、落ち着かなくなったり、感情を荒げたりする方も中には居て、申し訳なく思うことがたまにある。

そこではどう対応するかということよりも、知ってるか知らないかが問題となるのでやはり少しでも様々なことについての知識を仕入れておかななくてはならないと痛感する。その場でインターネットを検索して調べるといふ、いとまがあればよいけれども施設貸出の現場では、なかなかむずかしいだろう。

さて、その後毎月一回の貸出は順調に運び、毎回二五名以上の方が利用して下さっている。

昨年の九月から今年の八月までの丁度一年間の統計を見ると、利用者数がのべ三一人、本の貸出が五四九冊（漫画や雑誌を含む）、CDの貸出が四七三点となっている。月平均利用者は二六人となっている。

これを同種の施設である「ふれあいセンター福祉作業所」と比較すると福祉作業所の二〇〇四年度の利用実績が利用者数のベ二二二人、本の貸出が三五一冊、CDの貸出が七四七点なので、利用者数と本の貸出はさんさんプラザが多く、CDの貸出は福祉作業所が多いという結果になるが、総貸出資料数ではほとんど同じ利用がある。

最後に今後の墨田さんさんプラザでのサービスについて考えてみたい。

さんさんプラザに限ったことではなく、ふれあいセンター福祉作業所でも同じなのだが、本に興味を持っていて、貸出の時間中は一生懸命本を見ているにもかかわらず決して借りようとしてない人が必ず数人いる。

以前家族から借りてきてはいけなと言われて、それで降借りなくなつたという人もいるにはいたが、それだけではなく貸出を進めても借りてくれない人がいる。図書館としては自宅に持ち帰れば一か月楽しめると思うのだが、図書館が訪問する場を楽しんでいる方もいるようなので、そうした方には是非図書館に直接来てもらえたらと思う。

区内のあちこちから通ってきている方々なので、住所近くの図書館の適切な案内が作成出来ればよいと思っている。

また、中には本を借りるよりもむしろ私たち図書館



▲ 多目的室での貸出風景

員と話をするのを楽しみにしている人が何人かいる。そういう人は本当に真剣に様々な話をして下さる。前にも述べたが、思っていることを自由に気兼ねなく話せる場に図書館がなることがまず求められているように思う。

また、貸出に余裕が出て来たら、是非紙芝居などをやってみたい。

この一月に図書館のコンピュータの入替があり、半月休館になったのだが、そのためいつも第三水曜日に行っているお話を第一土曜日に変更して行った。そのお話会にすみだ教室に行っているMさんが参加して下さり、結構楽しんで下さった。

ウィークデイは仕事のためにお話会に参加することは不可能だがまた土曜日だったので参加して下さったわけで、彼らのような成人のためのお話を土日に開催することができれば何人かの方たちは参加して下さるのではないかと感じた。そうした意味でも、さんさんプラザでのお話は是非実現させたいと思っている。

いずれにしても知的障害の方々には図書館を気持ちよく利用してもらおうと思えば、まだまだ考えたり、留意したり、やらなければならぬことが山積していることを痛感させられる。

漢文のページ

賣炭翁

中唐 白居易

心ニ	可シ	身	賣リ	兩	滿	伐リ	賣
憂ヘテ	憐ム	上	炭ヲ	鬢	面	薪ヲ	炭
炭ノ	身	衣	得テ	蒼	塵	燒レ	翁
賤キヲ	上	裳	錢ヲ	蒼トシテ	灰	炭ヲ	
願フ	衣	口	何ノ	十	煙	南山	
天ニ	正ニ	中ノ	所レ	指	火	山中	
寒キヲ	單ヲ	食	營ム	黒	色		

蒼蒼 〓 白髪まじりの色。

可憐 〓 「あわれむべし」 感動を表す。

ああなんと気の毒なことよ。

何所 〓 疑問を表す。何のためにそうして働いているのか。

正單 〓 「正」はまったく、ちやうどの意。

(身につけているのは)単衣の着物だけである。

売炭翁

薪を伐り炭を焼く南山のうち

満面の塵灰煙火の色

両鬢蒼蒼として十指黒し

炭を売り銭を得て何の営む所ぞ

身上の衣裳 口中の食

憐むべし身上の衣 正に単なるを

心に炭の賤きを憂えて天の寒きを願う

貧しい炭焼きの老人は、冬にひとえの着物しか身につけていないにもかかわらず、少しでも炭が高く売れるよう、より寒くなること願う。

ある雪の降り積もった朝、老人は町へ炭を売りに出かけるが、横暴な役人にわずかばかりの代価で炭をとりあげられてしまったことが、この後に述べられている。





醉夢亭読書日記

第十三回

安田 章



韓非子の造語になる「想像」の力というもの、考えてみれば不思議な能力である。

眼前にない物がありありと眼の間に現出させるイメージ喚起力を人間以外の他の動物も持っているのかどうか私にはよく分らないが、多分この能力は人間が最も秀でていられると思われるのである。

おそらく、言語を操ることができるのは、人間だけであろうし、言語とイメージは表裏一体、不可分密接の関係にあると考えられるからである。何だか難解になりそうである。

ソシユールやチョムスキーをひもとく必要がでてきそうであり、機会があればふれてみたい気もするが、さてどうなることか。

「君の言うソシユールだとか言葉だとかいうことと、ぼくらの実生活とどんな関係があるのかねえ」と丸山圭三郎氏は親しい友人である辣腕の会社経営者に言われるという。

「僕にとつて関心があるのは、金と性（セック

ス）だけさ」「ぼくは死ぬのが恐ろしい。」（「言葉と無意識」丸山圭三郎 講談社現代新書）

金と性と死。これらへの関心と言葉とは果たして関係のないものであるうか。結論から言えばおおいに関係ある、というのが丸山氏の主張である。

関係あるというより、ずばり言葉そのものかどうかというのである。つまり、「貨幣は言葉」であり、「性も言葉」であり、「死も言葉」である、と。そんなこと言われても、プラトン、デカルトの近代合理主義にすっかり染まりきっている我ら現代人にはなんことやらのよく分らない。

「関係でしかないものをA物Vだと思ひこむばかりか、A物Vを生み出すのが関係であることに気づかないのである」（前掲書）。ということであるのだが、さて、如何であろうか。「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」というフレーズがヨハネ福音書の冒頭にあるが、このフレーズなかなか意味が深そうではないか。

「関係でしかないものをA物Vだと思ひこむ」錯覚から、凡人はさまざまに苦悩するわけだが、仏教思想では「空」という概念でそのあたりつまびらかにしている。

この世に存在する何物も実体ではない、このことを

仏教の經典の一つ「般若心経」は説いている（「声に出して読む般若心経」サンスクリット語・チベット語・日本語での読経の口付 山名哲史 明日香出版社）。

出して読む般若心経」サンスクリット語・チベット語・日本語での読経の口付 山名哲史 明日香出版社）。

「空」の思想を展開したのはインド人のナーガールジュナ（漢訳名は龍樹）であり、「大乘仏教とよばれるものは、みなかれから出発したのである。そのため日本では、かれは南都六宗・天台・真言の『八宗の祖師』と仰がれている」（「龍樹」中村元 講談社学術文庫）そうである。

このナーガールジュナは若い頃から秀でてはいたが、悪さすることも達者であった。「彼は、これも才能ゆたかな三人の親友をもっていたが、ある日たがい相談し、学問の誉れはずでに得たから、これからは快楽を尽くそうと決め」、「術師について、自分の身体を見えなくする隱身（おんしん）の秘術を習得し、それを用いて王宮にしばしば忍びこんだ。一〇〇日あまりの間に、宮廷の美人はみな犯され、子をほらむものさえ出てきた」（「龍樹」中村元 講談社学術文庫）。

話は逸れるが、ゼロを発明したインド人は数学にすぐれ、世界各国に「技術者を送り出しているということであるが、そのインドでは二桁のかけ算を暗記しているらしい。

「二〇×二〇はこの学校でも教えます。インドの子どもはだれでも二〇×二〇までは言うことができますね。あとは先生によってちがっていて、技術者になるような人は頭の中で九九×九九までのかけ算ができるようになりませう」と日本の派遣会社に所属するインド人のヴィカスさんは述べている（「二桁のかけ算一九一九（イクイク）」かえるさんとガビンさん ライブドアプリッシング）。

で、日本人も九九の暗記のみにとどまらず、さらなる挑戦をしようと前掲書は提案しているわけだ。例えば、一九×一九は三六一であるが、これを「一休一休寒い」と覚えるわけ。一から一九までのそれぞれ数字にキャラクターをあて、ストーリー的に脳にインプットしようという目論見である。

一は「ヒヒ」、マントヒヒのヒヒで、二は「ビキニ」、一四は「伊代（いよ）」、松本伊代の伊代、一九は「一休（いっきゅう）」という具合である。故に、一四×一四＝一九六は「伊代、伊代、一苦労」、一×一四＝一四は「ヒヒ、伊代、引越し」とな

る。

閑話休題。想像力、言葉、意識、無意識、などに
いて考えていくと、じゃあ、それらを司っているのは
人間のどこの臓器であるのか、そしてミステリアスな
問いとして、ここら或いは精神というものはどこにあ
るの?という問題にもなってくる。

通常、ここらや精神は頭、つまり脳
にあると考えられるわけで、だからこ
そ脳死を人の死としようと擬制せられ
るわけである。



しかし、ここらや精神が脳以外の臓器、心臓や肺や
腸や胃袋にあるとしたらどうなるか?心臓や肺など
の臓器を移植された患者にはドナーのここらや精神も
移植されるのではないか?「ドナーが仮に色情狂だつ
たら移植されたヒトは色情狂になります。

色彩の好みも、食物の好き嫌いも、色情の好みもす
べては、腸管の吸収と排出能力の好みなのです」と西
原克成氏は断定する(「**内臓が生みだす心**」西原克成
ZHEXブックス)。こうなってくると、脳死だから
といって簡単に臓器移植ができるものかどうかの
ふーむ、考えさせられる。

以下次号

【左は、去る二〇〇五年一〇月二八日(金)に催された、
「出版〇〇研究会(成松一郎・読書工房代表)」のシンポジ
ウムに向けられたレジュメです。

本会がソースデータとして使用させていただいている
「青空文庫」の代表の富田倫生様のご講演です。

中にもございますように、本来身体障害者を念頭に置
いたサービスではないものが、その応用範囲の広がりとし
もに、視覚障害者向けのデータになって行くという、予想
を超えた動きの中で、その進路の修正とともに、その応用
の門戸を最大限にオープンにして来た軌跡を知ることが
できます。

残念ながら本会の活動である漢点字訳のソースとして
の応用までにはご存じいただいていたようですが、今回
を機に、本会の活動にもご関心をお寄せいただけること
を願って止みません。

なお、この「〇〇」とは、「ユニバーサル・デザイン」の略で
す。】

第四回出版〇〇研究会

二〇〇五年一〇月二八日 〈参考資料〉

今回のテーマに関連する内容の、原稿です。



ヘイネーフル・ライブラリー

とつての青空文庫



富田倫生(青空文庫呼びかけ人)

初出:「現代の図書館」一九九九年九月号 Vol.37 No.3
〔「ヘイネーフル・ライブラリー」とは、「障害者を含めた幅広い人の力を引き出す「図書館」との意を込めた、「現代の図書館」編集委員会の造語である。〕



ご講演中の富田氏

青空文庫とは、インターネットの上に開いた、無料公開の電子図書館です。

(<http://www.aozora.gr.jp/>)

図書館を名乗っていますが、ここに紙の本は、一冊もありません。蔵書はすべて、コンピュータで扱う電子テキストでそろえています。

開館の準備にあたっていた時点で、私たちには、ヘイネーフル・ライブラリーとして青空文庫を設計しようという意図はありませんでした。

障害者に使ってもらえる可能性があることは、あとになってから、彼らへの読書支援に携わる人に教えられませんでした。「文庫が選んだ電子テキストには、当初予測していなかった使い道に、あとから対応する柔軟性がある。」青空文庫の活動にかかわる中で、私はその後も、繰り返しその事実に向き合うこととなります。

視障障害者に対して我々がなし得ることは、いまだ可能性の段階にあり、本特集に原稿を寄せることにはためらいも感じました。けれど、電子テキストの秘める柔軟で強靱な底力についてなら、私は確信を持って語れます。

予想しなかった障害者読書支援の可能性が見えてきたように、図書館の役割と実態に精通した方の知恵が加われば、青空文庫は新しい発展の道筋を見つけられるかもしれません。

その呼び水となることを願いながら、私たちがなぜ、インターネットの電子図書館作りを志し、なにをどこまで進めてきたのかを、ご紹介したいと思います。

電子本から電子図書館へ

青空文庫に収録している作品は、二種類に分けられます。作者の死後五十年を経て、著作権の切れたものと、著作権者が「公開してもかまわない」と言ってくれた作品です。

著作権が切れたのならともかく、わざわざ自分の書いたものをタダで読んでもらおうとする人がいるでしょうか。自費出版を試みるアマチュア以外には、ほとんどいないと思われるかもしれませんが、けれど、職業として書いている人、書いてきた人の中からも、稿料なしで、インターネットに原稿を寄せる人が、たくさん出てきています。私も、その一人です。

もともと、本や雑誌に原稿を書いていた私が、電子図書館に関わりを持つきっかけとなったのは、一九九〇年代のはじめに出合った、コンピュータの画面で読む本でした。「電子本なら、自分のパソコンで簡単に作れる。絶版になった本を、もう一度形にできる」と思ったのが、そもそもの始まりでした。

本を二つに割ってみれば、たいていのものの片側には、「読んで欲しい」という、書き手の気持ちが続まっています。残りのもう一方を満たすのは、商売の理屈です。

出版社は常に、「その原稿を本にして、まとまった部数



がはけるだろうか」吟味せざるを得ません。さらに、慎重に原稿を選んで作ったはずの本も、ほとんどは満足に売れないのが現状です。さばく見込みの立たない本も、持っていれば資産と見なされ、税金がかかります。

倉庫代も必要ですから、いつそ切り刻んでしまえと、断裁処分が待っています。時間をかけてようやく初版を売り切ったような本は、気軽には再版できません。

自分の本で何度か絶版や長期の品切れを体験してきた私は、電子本を見て、「読んで欲しいと思う気持ちを取りめる、手頃な器が見つかった」と感じました。広く配ることや商売にすることは無理でも、本になれなかったり絶版になったものを救うことだけは、できるだろうと考えたのです。

ところが、九〇年代半ばを前後して、インターネットが普及しはじめると、電子本にできることは、もつともっと大きいのではと考え直すようになりました。

一言でいえば、インターネットとは、いくつもできていたコンピュータのネットワークを、相互に繋いでしまう仕組みです。

これが普及したことで、世界中のすべてのコンピュータを接続する可能性が生まれました。これまでパソコン通信を使っても電子本は配れましたが、その範囲は、サービスの利用者に限られていました。それが、世界中の人

に、自分の電子本を届ける道が開けたのです。

変化したのは、道だけではありません。インターネットは、電子本におさめる、文章そのものも変えはじめていました。

電子ネットワークに息づく新しい文章の味噌は、参照したいと思ったその瞬間に、別の人が書いて別の場所に置いている、別の文章を開ける仕組みです。

これまで、書かれた内容をさらに詳しく知りたい人のために、紙の本では参考文献が示されてきました。この機能が大幅に拡張され、より詳しく知りたいと思ったらその瞬間に、世界のどこかのコンピュータに置かれた該当の文書にジャンプして、内容を確認できるようになったのです。いわば〈超参照〉を可能にした、こうした文章のあり方は、ハイパーテキストと名付けられていました。

ライターとしての私の主要なテーマは、パソコンの歴史です。私を取り上げてきた人物にとって、コンピュータはお手物ですから、その多くが、早い時期からインターネットを活用していました。

自分の考えや体験を文書にまとめ、世界中のコンピュータから読めるように仕立てていたのです。

ハイパーテキストが使えるようになると、彼らの何人かが、「あの意見は大切だ」と思うところに、リンクと呼ばれる〈超参照〉の絆を張り始めていました。彼らが張ったリン

クをたどりながら、パソコンの歴史を巡る文章の世界を歩き回っていると、私の中にこれまでに味わったことのない感覚が生まれてきました。

それぞれは別個に書かれたものでありながら、リンクによって結びつけられた文章の総体が、あたかも「パソコンの歴史を書き残しておこう」とする大きな意思を形成しているように感じられはじめたのです。

こんなふうにも思うと、もういけません。自分が書いてきたパソコンの歴史に関する原稿を、インターネットで読めるようにし、「これぞ」と思える大切な文書にリンクを張りたくくなりました。

世界規模の知のネットワークに、末席でもいいから加わりたくないと願うなら、差し出すべきは当然、自分の書いてきたものの中でも、もつとも力を込めたものとするべきでしょう。

私にとってそれは、『パソコン創世記』(1989)のブリタニカ刊と呼んでいた本でした。私が存在を実感した知のネットワークは、無料で公開されているからこそ、自由にリンクを張り合せて育っていったものです。その一部に加わりたくないと願うのなら、無料公開は避けられませんでした。

紙を土台とした文章の基調は、いわば自力主義でしょう。ここで書くこととは、自分が世界を認識し、その像を言葉で定着する営みです。

一方、電子テキストの世界では、他者の認識を自分の記述に有機的に連携させることが可能です。極論すれば、それぞれの要素は、世界でもっとも適任の人に書いてもらえばいい。そうした文書がそれぞれに存在することを前提とし、書く人は、本当に自分が書くべきことに集中して、あとはリンクした先に人に語ってもらえばいい。となると書くことの変化は、不可避に、考えることの変化に繋がっていくだろう。そして、職業として書く人にとっては、生き方そのものの変化にも結び付かざるを得ないと考えるようになりました。

誰もが使えるコンピュータは、本を変える。それらをすべて結びつけるインターネットは、出版産業を変え、図書館を変え、文章そのものに根底的な変化を迫るだろう。

書く行為の専門家も、自らの像を変更せざるを得なくなる。そう考えるようになっていく道筋を、私は『本の未来』(アスキー出版局)と名付けた一冊にまとめました。

「青空文庫」の名称に繋がった、「青空の本」というイメージは、その前書きに盛り込んだものです。

インターネットと結び付いた電子本なら、どこにいても、思い立ったその場で開けるようになる。青空を見上げれば、そこに本が開かれるような感覚で、読めるようになるはずだ。青空の本はまた、



互いに響き合い、必要なページが次々とそこに開かれるだろうと、夢を語りました。

私設電子図書館、青空文庫の出発

電子本に興味を持っていた仲間四人が集まって、電子図書館のようなものができないか相談しはじめたのは、一九九七年の二月です。各人にそれぞれの思いがありました。私にとっては、青空の本の実現が目的でした。

個人のウェブページを作るのとまったく同じ感覚で、暇があるときに少しずつ進めていこうと考えていました。準備はなかなかかどりませんでした。著作権の切れたものと、切れていないものを合わせ、ようやく十編ほどを用意して開館らしきところまでこぎ着けたのは、半年以上たったその年の八月でした。

本に印刷されている文章を、電子テキストに変換し、校正をほどこす作業は、仲間四人で、ゆっくり進めていこうと考えていました。ところが、「こんなことがやりたい」と書いておくと、「手伝おう」といつてくれる人が次々に現れました。

作業の手順をまとめたマニュアルを作り、どんな作品の電子化がどこまで進んでいるかを示すリストを用意したりと体制を整備するにつれ、協力者はさらに増えて、作業のペースが速まってきました。この原稿を書いている一九九

九年六月の時点で、協力者は延べ百五十人を越え、収録作品は五百五十編に迫ろうとしています。

自然発生的に生まれ、野放図な育ち方をした青空文庫は、使われ方の面でも、当たり前の図書館とはかなり異なっています。

インターネットに繋がったコンピュータに、電子テキストを置いてあるのが実態ですから、文庫には休みはありません。二十四時間、常に開いていて、いつでも、どこからでも、気が向いたときに利用してもらえます。

本の貸し出しに相当するのは、電子テキストを複製する行為です。誰かが借りていくとはつまり、インターネットの向こう側にある利用者のコンピュータに、コピーを一部作るという話ですから、「原本」は常に、文庫に残っています。「貸し出し中」という状態は存在せず、当然、返却を求めする必要もありません。

インターネットを利用しているのだから、世界のどこからでも使ってもらえると、理屈ではわかっていました。



けれど、開館間もなく、在メキシコ二十年とおっしゃる方が、「日本語の本への渴きをいやしてもらった」と掲示板に書き込んでくれたときには、あらためて広がりの可能性を実感しました。その後も、世界各国にわたっている日本人から、利用報告が寄せられました。

先日は、アメリカの日本文学研究者が作っている電子メール網に紹介したという連絡を受け、利用のネットワークが、さらに広がってきたことを実感させられました。

広がり感覚は、文庫の運営に携わる中で、別の領域でも繰り返す味わうことになりました。

私たち自身は、一般的なパソコンで読まれることを念頭に置いて、それにふさわしい形で電子テキストを用意しました。ところが世間では、電子手帳の親戚のような、小さな情報機器が盛んに使われるようになります。

それらも、中味はコンピュータですから、電子テキストの扱いは基本的に問題がありません。

ほとんど手間をかけることもなく、わずかに形式を調整してやれば、青空文庫の収録作品がそのまま読めてしまいます。

文庫本来の仕事に追われ、他の形式への変換を進められないでいると、「自分でやろう」と名乗りを上げる人が次々現れました。

どうせ変換したのなら、同じくインターネットに繋がったコンピュータに、処理済みのものを置いておけば、その機器を利用している人はみんな、手直しの手間なしに使えます。こうした形で、それぞれの機器に対応した、青空文庫の〈分館〉が育ちはじめました。

文庫を開いてほんの間もない時期、本を点字に訳すボラ

ンティア活動に携わっている方からもらった電子メールも、それまで私たちの頭にはなかった、電子テキストの可能性を教えてくださいました。

視覚障碍者の読書支援に、私たちの電子テキストを利用できるということです。

電子テキストは、視覚障碍者の本への架け橋となる

小さな突起の集まりからなる、点字の本はこれまで、点筆という専用の針を用いた手作業か、点字タイプライターで作られてきました。ただしこうした方法では、間違えたときはいったん突起を押しつぶし、再度打ち直さざるを得ません。一行飛ばしてもすれば、区切りの良いところからもう一度作り直すしか、方法がありませんでした。

こんな難しさを抱えた点訳に、パソコンが新しい道を開きました。あらかじめパソコンで必要なデータを作り、誤りをチェックした上で、最後に専用のプリンターを使って点字に打ち出す方式が工夫されていったのです。

日本の点字は、五十音に基づくシステムです。点訳のデータも、仮名を分かち書きしながら作ります。

青空文庫にある電子テキストを、そのまま点字用のデータとして用いることはできません。けれど、パソコンで漢字仮名交じり文を入力する工程を逆にたどれば、仮名

にもどしてやることは可能です。

さらに、適当なところで切り分けて分かち書きしていく工程にも、パソコンの助けが借りられるでしょう。仮名への変換、分かち書きとも、機械に任せきりにしてはミスが頻出するでしょうが、ゼロからはじめるよりはよほど効率的です。青空文庫の電子テキストには、点訳の基礎データとしての使い道があると知りました。

さらに特殊な専用形式のデータではなく、漢字仮名交じりの普通の電子テキストを原点において、そこからすべての視覚障碍者に対する読書支援の道筋を付けようとする考え方があることも教えられました。電子テキストを、ある時は点字、ある時は音声に変換し、弱視者向けに大きな文字で文章を示した、拡大写本へも活かしていこうというのです。

電子テキストを支援の大黒柱に据えようと考えている、視覚障碍者読書支援協会の浦口明德さんにお目にかかり、現状と可能性について教えを請いました。

(<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~BBA/>)

視覚に障碍を持つ人は、日本に約三十五万人いるそうです。そのうち、まったく目の見えない人は十二万人で、点字を読める人となると、さらにその三分の一の四万人に限られます。点字を読める人は、視覚障碍者全体の十パーセントあまりに過ぎません。

もつとも大きな割合を占める二十三万人の弱視者と、全盲でも点字に親しんでいない人には、別の形の支援が必要です。具体的には、文章を声で読んだ音訳テープと、拡大写本が求められます。

この内、音訳と点訳を担ってくれるボランティアは、それぞれ一万五千人ほどいるそうです。一方、拡大写本作りにあたる人は千五百人と、極端に少ないのが現状です。しかも、拡大写本のひとつとは、今も手書きで作られていると聞き、大いに驚かされました。弱視者への読書支援は、極端に立ち後れてきたらしいのです。

学生時代から点訳のボランティアに携わってきた浦口さんは、ワープロやパソコンが普及する中で、これを使えば支援体制を大幅に強化できるのではないかと考えました。特に注目したのは、穴になってきた、弱視者への支援です。

縦に対して横の細い明朝体の文字を、弱視者は苦手とします。けれどパソコンなら、太さの均一なゴシック系の文字でプリントアウトすることは、造作もありません。一つのデータを元に、それぞれの視力に合わせた文字の大きさを選んで打ち出すことも、もちろん可能です。

さらに最近では、パソコンの画面で快適に文字を読むための（書見台）的なソフトに、優れたものが登場しています。電子テキストを、即座に読みやすい文字で表示し、文字の種類や大きさ、行間の空き、縦組み、横組みなどを

即座に切り替えられる「FontFace」というソフトを使えば、弱視者にパソコンの画面上で読んでもらうことも可能です。

青空文庫では、一つ一つの作品に対して、三種類の形式のファイルを用意しようと決めていました。縦書きで、かなり読みやすい文字の表示できるエキスパンドブック。インターネットのウェブページに広く使われている、HTML。加えて、もつとも基本的で、いろいろな用途や機器に使い回しのきく、テキストです。作業の流れとしては、まずテキストを作り、そこから残り二つのファイルにアレンジしていきます。

出発点となるテキストを作る際には、ルビをどう表示するか、「」の漢字コードで表現できない文字をどう示すか、さまざまな注をどのように組み込んでいくかといった点について、あらかじめ約束事を設けておかなければなりません。

そこで同協会の勉強会におじゃまし、『原文入力ルール』と名付けられた協会の決まりに準拠して、青空文庫のテキストを作っていくことにしました。念頭にあったのはもちろん、青空文庫に蓄積していく電子テキストを、いずれ視覚障害者読書支援の場で、広く使ってもらえる日が来ることへの期待です。

私たちは、電子テキストの可能性を信じています。け

れど、これまで視覚障碍者を支えてきた人たちが、すぐにそう納得し、新しいやり方に賛同してくれるとは限りません。支援者はこれまで、目の前にいる、支えるべき人たちの顔を直接見ながら、手作業で一冊の本を書き写し、点字本を仕上げ、本を朗読してきたはずです。受け取ってくれる人との直接のつながりが、作業を引き受ける気持ちの源になつていたでしょう。

規模の小さなボランティア・グループが、横の連絡を欠いたまま活動し、支援体制が分散化されてきたことは、手作業による「一品生産」の時期にはむしろ、当然だったのかもしれない。

長くこうした形で支援を担ってきた人たちに、まったく異質のコンピューター流の考え方を押しつけることは、難しいでしょう。青空文庫の電子テキストを、視覚障碍者の読書支援の場で活用してもらうためには、一人一人の理解を得て、協力の手を一步一步繋いでいくことが必要になるはずです。

財政的な基盤をまったく持たない青空文庫が、イネーブル・ライブリーとしてのそれも含め、さまざまな可能性を自分で開いていくことは、率直に言って不可能です。著作権切れの作品を電子化し、公開していくというその仕事自体が、私たちにとってはあまりに巨大です。文庫の電子テキストを、広く使いこなす役割は、全面的に「あなた」

に委ねざるを得ません。

私たちができることは、あなたが使える電子テキストを拡充し、自由な利用を保証していくことだろうと思います。

文庫に収録されている作品は、どんなふうに使えるのかという点で、私たちの取り決めはこれまで、曖昧な点を残していました。このままでは、活用の道を大胆に開けないという懸念が、膨らみました。

そこで、著作権の切れた作品に関しては、「有償、無償を問わず、自由に複製、再配布してもらってかまわない」と、はっきり宣言しようと思ひ立ちました。

文庫の作業に関わっている人の中には、さまざまな考えがあります。協力してくれた人すべてに加わっていた議論には、長い時間を要しましたが、最終的には「著作権切れの二次配布は、自由」を原則とすることに決しました。これで、私たちの用意した著作権切れの電子テキストは、ほとんど制限なしに使ってもらえます。

青空文庫は、電子図書館を名乗っています。

インターネットを取り込むことで、図書館の可能性は大きく広がっていくと、私は信じています。けれど、視覚障害者への読書支援の可能性は、その仕事に携わってきた人こそが見つけられたように、新しい図書館への扉を開くのは、これまで人と本とを繋いできた、あなたの知恵と経験でしょう。

その第一歩として、青空文庫に目を向けてもらえないでしょうか。ここに蓄積された電子テキストの新しい使い道を見つけてはもらえないでしょうか。

私たちの試みの彼方に、新しい電子図書館の姿を思い描けるのは、きっとあなたです。



十一月二十三日の羽化の会の例会で。

岡田「羽化の会の会報ですが、執筆者が限られている傾向がありますので、別にどなたか書いてくださる人は……白石さんいかがですか」

白石「いや……会報に皆さんのお書きになっているような社会的なあれこれについてはうまく書けないものから……」

岡田「いやいや、なんでも良いんです。気にしないでどうぞ」

白石「ちよつと無理だと……」

岡田「いつも、メールではあれこれ屁理屈を、いや失礼、長々となんだか書いていらつしやるじゃないですか。あの

流れで何か」

白石「最近、中国料理のおこげの料理を作りましたので、

そのお話 شدつたら」

岡田「料理ですか……別のことならなんでも」

白石「野良猫の口説き方とか……」

岡田「……。ともかく(時計をさぐりながら)次の議題、

明年の新年会について早急に討議したいので、よろしく、お願いしますね」

向ヶ丘遊園駅の近くに民家園があり、一日散歩するにはもつてこいの所である。古い日本家屋の藁葺き屋根の家などを見ると、なんとなく子供時代の郷愁に浸れもする。土間に入ったときの薄暗さなどは、今ではもう見られなくなつてしまった光と影の趣がある。ちよつとしたタイムスリップの時間なのだ。

園内にはそば屋があり、休日のひるどきなどはなかなか人気があつて、たくさんのお客で一杯となる。

しかし、私の昼食はいつも、持参した弁当にしている。しかも、ことさらに「なつか弁」。アルマイトの「ドカ弁」は、今となつてはのぞむべくもないが、せめて中身は本格の「のり弁」としている。コンビニの、「ご飯の上に一枚ペランと海苔がのつたようなのはどうい許し難い所業である。

「ご飯は極力薄く敷いて、海苔は三層とありたいものだ。

子供のころ私の母親が作ってくれた「のり弁」は、その最上層が黒々とした海苔であった。面倒な「のり弁」を作り始めたものの、海苔をご飯の上に敷いた直後、母親は精根尽きてしまったようだ。これでは海苔がフタにへばりついてしまう。現在の私のレシピでは、三層の海苔の上に米粒を薄く敷き、カンナで削った花カツオをパラパラ蒔いて、中央に梅干しを置くことにしている。

でもって、鶯の声などを聴きながら園のベンチで弁当を食べるといわけだ。「秋の鶯もいいものだね」などと、歯の浮くようなことを言い、浮いた歯を押さえるついでに、歯に着的いた海苔をはがす。「やはり、この醤油と海苔の香りがたまらないね……」そんな声をかける伴侶あるいはスウィート・ハートがいらないのが残念ではあるが、これもまた人生色々。

しかし、この園を過去の風物と見立てた場合、常々なにかもの足りないものがあると思っていた。ある日、ボランテイアの人が、古民家のメンテナンスのために囲炉裏で火を焚き、煙煙しているに出くわした。あたりには、炭の匂いが充満。「ハハア、これだな」と気づいた。つまり、足りなかったものは匂いだったのだ。

例えば、子供時代（昭和三十年代）の普通の民家は、様々な匂いに彩られていた。汲み取り便所の臭いには閉口だったが、それに双璧をなすように薪や炭の臭いが台所や、

風呂場で印象深かった。昨今、昭和三十年代をテーマにした博物館や飲食店が数多く建てられ、歴史的文物を取りそろえ、様々に意匠を凝らしているが、さすがに匂いまでは再現できないようだ。

今から二十年ほど前、自作の炭に凝っていたことがあった。もちろん、本格的な炭焼き窯を作るわけではない。庭の片隅で、タオルを頭に巻いて炭焼きの親爺に変身するわけだ。

木材は庭の枯れ木とかだが、変わったところでは、竹細工の人形など。炭になった竹人形などは、これはこれではなかなか味のあるものだった。燃料は、紙、布、枯葉などで、石油化学製品は避けた。慣れないうちは煙にいぶされるばかりで、なかなか良い炭はできあがらなかった。できあがつた炭を七輪一杯に詰め込んで、火をつけ、釜の飯を炊く。遠赤外線の効果とでもいうのだろうか、なかなかおいしい飯が炊けた。

炊飯器ではないから、おコゲの握り飯なども作れた。そのあとは、秋刀魚を焼き、最後のオキで味噌汁を作って夕餉の完成。もうまったく「さんま苦いか塩っぱいか」の世界だったな。

しかし、それも木材が不足して、燃やす紙から赤や青だの炎が出るようになり、不気味になって炭作りは止めてしまった。焼却場から出るダイオキシン問題が発生したのはその直後だった。



「朝日歌壇・俳壇」を漢点字訳して

岡田 健嗣

雨雲に 吾妻は見えず 山中の

阿部氏の無事と ただ祈るのみ

原町市 稲村忠衛

評 (略) 第十首、本歌壇、古くからの常連・阿部壮作氏の生還を祈る作。八月三十一日付の朝日新聞福島版に同氏の名をあげて「吾妻連峰登山の男性が遭難か」の記事が出た。その後まだ生還の報はない。

(朝日歌壇二〇〇五年一〇月三日、佐々木幸綱選より)

右は、朝日歌壇に選出された歌と、佐々木幸綱先生の選評である。

私はこれによつて、初めて阿部氏の遭難を知った。ショックであった。

本会が現在の活動に入るに当たつて、朝日歌壇と俳壇の漢点字訳は、一つのメルクマールである。その始まりは、本会の活動を遡ること数年前であった。

私が漢点字訳の活動を考え始めて、墨田区立緑図書館で活動している点訳ボランティア・グループ・点訳ひかり会の皆さんにご相談したのは、もう十五年近く前になる。

漢点字訳の活動と言っても、これがしたいということから始まったのではない。何をすればよいのだろうか、色々考えた。

視覚障害者には、短歌や俳句に親しんでいる人が多い。漢点字の使用の中にも、そのような人はいるはずだ。しかもカナだけの点字でない、生の漢字仮名交じりの生きた短歌や俳句、それは恐らく大変な魅力を発するに違いない、私はそう考えた。

一体具体的にはどんなものを漢点字訳するのがよいのだろうか？歴史的な資料もよいだろうし、個人の歌集や句集もよいだろう。が、継続的に発行できて、ボリュームもそこそこで、定評のあるものがよい、とやや欲張った考えに取り付かれながら、当時寺島図書館に勤務しておられた山内薫さんにも相談した。

継続的に発行すると言えば、専門誌である。しかしボリュームがあり過ぎる。

しかも雑誌となると、結社の発行になるものになるの、それには少々躊躇いがあった。

しかし「今」を詠んだものがよい、そう考えているうちに、何のことはない、それまで音訳で親しんで来た、毎週朝日新聞に掲載されている「朝日歌壇・俳壇」に思い至った。

歌壇の選者は現在もお元気な佐々木先生と馬場あき子先生、それに鬼籍に入られた島田修二先生、近藤芳美

先生のご四方であった。現在は、高野公彦先生と永田和宏先生が加わって、選歌されている。

俳壇の選者は、稲畑汀子先生と金子兜太先生、そしてやはり鬼籍に入られた加藤楸邨先生と山口誓子先生のご四方であった。

その後、山實先生が加わられたが、やはり既に鬼籍に入られた。現在は、川崎展宏先生と長谷川權先生が加わって選句されている。

短歌や俳句に関して、音訳やカナ点訳をしておられる方が、「大変読みが難しいのです」と言われてよく耳にして来たのだが、それまでは何のことやら全く分からなかった。五七五七七、五七五と、音が並んでいるのが短歌や俳句だろう、そんな風に私は捉えていたのだ。

ところが、漢点字訳の活動が始まるとともに、たちまちにしてその意味を知ることとなった。全然読めないのである。まさにエクササイズの始まりであった。このようにして私の文章との付き合いが始まったのであるが、とともに、阿部氏のお名前に出会ったのであった。

氏に関しては、私は何も存じ上げない。福島県の郡山市にお住まいで、長く茶房を経営されておられる、朝日歌壇の読者であれば誰でもが知っていることである。だがその存在は大きかった。歌壇・俳壇の漢点字訳の活動を始めてみると、阿部氏は何時もそこにおられた。

また別に、私はいつも追っかけをやっている、四人の先生方の選、毎週四十首が掲載されるが、全てが秀作に違いないのだが、それでも私に響く歌とさほどでない歌がある。これはどうしようもないことで、私のように鑑賞力の乏しい者にも、多少の好みは許されるであろう、そう考えることにしている。

その当初は相当にご高齢であろうと想像される女性の歌に惹かれた。一九九六年に本会を設立して、この歌壇・俳壇の漢点字訳を引き継いだ、そのころその方の歌の掲載が間遠になって行った。そして載らなくなった。寂しかった。

現在も、密かにお一人を追っかけている。大変寡作な方のように、多くは載らない。

他にも何名かおられるが、阿部氏はそのような対象ではなかった。が、今調べてみると、私の抱いていた印象の強さにしては、案外寡作な方のお一人だったのかもしれない。左は、今年選歌されたものである。山を愛し、珈琲を愛し、歌を愛したそのお心が偲ばれる。

営業と続ける余力ありますと

登頂写真と店内に掛く

冬晴れの光さしけり

窓辺には業のよすかの珈琲釜あり

「お早う」と安達太良山に
真向かいて手旗信号を送る立春

大いなる強さありがとう

安達太良の雪嶺見つつ店開けにゆく

(二月)

竹島に日韓関係

揺れており至虫色の外文ゆえか

(四月)

山びらき前の安達太良

梁しかりひとり山路ひとりの時間

通学に日々仰ぎたる

安達太良の峰をつかしも雪涙登る

(六月)

あえぎあえぎ一切経山

登りゆく年々深む老い測りつつ

ロースターにコーヒー豆が

爆ぜしきり明けのわが町に活気生れ初む

(七月)

かもしかの如くにガレと

降りてくる女に驚く花の早池峰

峰の風浴びて生氣が

よみがえる山家育らばやはり山の子

(八月)

「報告と」案内

本号は二〇〇五年最後の発行分です。来年二月に五十四号が発行されますと、本誌・機関誌『うか』も、九年目を終えることになります。いよいよ十年目です。

それに先立つて、本会の活動は来る二月から、十年目に入ります。思えば長くもあり短くもあり、漢点字訳書を製作するというこの活動も、会員相互の協力と、ご支援を賜っている皆様のお力の賜物と、深く感謝申し上げます。

一 東京の漢点字訳講座が修了しました。

NPO法人・トータルビューマンネット二一の主催、十月五日から隔週全四回、東京都港区のヒューマンプラザ七F・竹芝小ホールを会場に行いました漢点字訳ボランティア講座が、十一月十六日を以て、無事終了致しました。

内容的にはこの六・七月に横浜で行いました講座と同様に、漢点字のご紹介と本会の漢点字訳の方法

をご紹介するものでした。受講者の皆様を、漢点字訳の入り口までお連れするのがその目的でした。

主催者であるTHN二一の安田章・高野路子両理事には、受付等、さまざまな雑務をお引き受け下さって、縁の下の力持ちとして支えて下さいました。

点訳ひかり会の斉藤寿美子様には、講座ばかりでなく、今後も活動の要所要所でご相談に当たっていただきます。

本会からは、木下・高橋・吉田のお三方がお手伝い下さいました。大変ありがとうございました。

また、ガイドヘルパーの方々にも、細かくお世話をいただきました。

とりわけ墨田区の清水様には、プロジェクトその他、機械設備の操作をお引き受けいただきましたことに、感謝申し上げます。

講座最終日に、受講者の皆さんによる漢点字訳のボランティア・グループの発足を期して、名称を「東京漢点字羽化の会」としました。

十一月七日に、第一回の定例会を行いました。実際の活動に一步を記しました。

二 漢点字講習会にご後援

二〇〇三年から、横浜市のご後援をいただいて、漢点字講習会を開催して参りましたが、来年度からは、横浜市教育委員会と横浜市社会福祉協議会のご後援をいただくべく、申請することに致しました。

一人でも多くの視覚障害者に漢点字を知っていただいて、非識字の状態にピリオドを打っていただきたいと願って止みません

視覚障害者の周辺の晴眼者の皆様には、視覚障害者の識字に当たって、一層のお力添えをいただきたくお願い申し上げます。

E-MAIL: eib_okada@yhb.ne.jp

URL: <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

